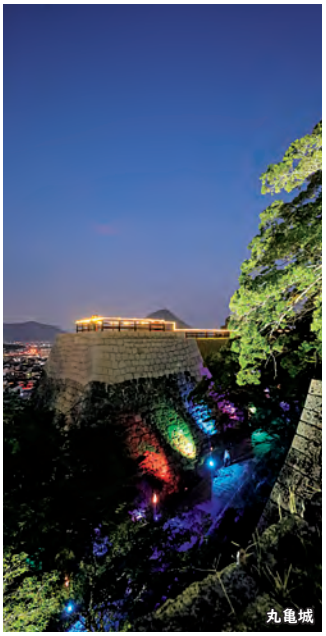
令和６年２月29日　発行

学校体験演習（２年次生）

未来からの留学生

サンポート高松


丸亀城

香川大学教育学部
附属教職支援開発センター
センターニュース

No.11

教育実習評価授業（附属中学校）

教育実習　お別れの会（附属小学校）

PICK UP NEWS　教職支援開発センター　失火を経て蘇り、本格始動へ――

2022年９月未明、教職支援開発センター（以下「教職センター」）１階において火事が発生し、昨年度後期を中心に約半年間、センター１階で行っていた業務ができない状況が続いていました。その後、復旧工事や施設整備作業を経て、2023年５月より、ほぼ失火前の教職センターの状態を取り戻しています。

ただ、全てを新しいものにすることは難しい状況にあります。例えば教科書・指導書などの書籍は、表面に付着したすす汚れなどのクリーニングを専門業者に依頼し、できるだけ汚れのない状態で閲覧できるよう整備しています。それでも一部に、すす汚れが残っている箇所もあり、ご迷惑をおかけすることがあるかもしれません。

限られた予算内ではありますが、さらに本学学生・教職員の皆様に活用いただきやすい教職センターを目指して、また再びの災害が生じないよう安心・安全な教職センターとして、引き続き整備を進めています。

◆センター長あいさつ／令和５年度附属教職支援開発センター事業計画／令和４年度　センター日誌…… 2
［特集］学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 …… 3
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動　研究グループ報告 …… ３～６
◆令和４年度　教育実践集中講座　実践報告…… 7
◆令和４年度　センター公開講演会　報告…… 8
◆令和４年度　国立大学教育実践研究関連センター協議会　報告…… 8
◆附属学校園　この１年　～2022～…… ９～12
◆教育実践総合研究（第49号）原稿募集…… 12

センター長　あいさつ

関係各位におかれましては、お忙しい毎日をお過ごしのことと拝察いたします。日頃より本センターの事業にご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

本センターの事業は多様です。具体的に2021年度までは、①実地教育推進、②教職支援推進、③教員研修推進、④教育開発/ICT推進の４部門で事業を進めておりましたが、特別支援教室「すばる」の坂出から幸町キャンパスへの移転に伴い、2022年４月に⑤特別支援教育推進部門が設置され、５部門で事業を進めております。多様性が求められる時代ではあるものの、センターとしてその多様性を生かし、教員養成や教員育成などに関する教育や研究及び事業をどのように発展させれば良いのか、模索は続いております。

このような中、2022年９月20日未明、センター１階において火災が発生しました。幸いなことに人的な被害はありませんでしたが、原状回復のため大幅な改修が行われ、事務室は４月に再開しました。多くの方々に多大なご心配やご迷惑をおかけしました。お詫びを申し上げます。

センター内外の状況は大きく変わってきておりますが、従来からの事業を継続し、新たな課題に挑戦して、教育や研究に関する貢献を行う所存であることには変わりありません。今後とも附属教職支援開発センターに、ご支援・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

附属教職支援開発センター長
松 村　雅 文

令和５年度 附属教職支援開発センター 事業計画

１　実地教育推進部門（実地教育に関する管理及び運営）
（1）「大学入門ゼミ」「教職概論」（１年次）
（2）「教育実践プレ演習」（２年次）
（3）「教育実践演習」（事前事後指導）（３年次）
（4）「保育・教職実践演習」（４年次）

２　教職支援推進部門（教職支援に関する管理及び運営）
（1）教職志望学生への日常的支援活動
・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教採対応
（2）教職志望学生及び現職教員への教育相談活動
・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
（3）教育実践集中講座の開催

３　教員研修推進部門（現職教員研修に関する管理及び運営）
（1）現職教員への研修支援活動
・香川県教育センターとの連携研修
・NITS四国アライアンス（香川センター）連携研修
・小学校外国語のための免許法認定講習
・香川県教育委員会免許法認定通信教育（特別支援学校教諭）
・香川県教育委員会免許法認定講習

４　教育開発/ICT推進部門（教育開発に関する管理及び運営）
（1）教材・資料の収集・管理・活用支援
・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
（2）　ICT機器の活用支援
（3）研究活動の報告等
・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
（4）関係機関との連携
・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等

５　特別支援教育推進部門（特別支援教育に関する管理及び運営）
・教育学研究科、教育学部における特別支援教育に関する教育活動への協力
・特別支援教室の運営、業務の遂行
・香川県教育委員会、高松市教育委員会、附属学校園、関係諸機関との連携

６　その他
（1）広報活動
・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
（2）学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導

令和４年度　センター日誌

＜前期＞

４月13日(水)　特別支援教育実践演習　第１回全体指導
４月14日(木)　教育実践演習　第１回全体指導
４月21日(木)　教育実践演習　第２回全体指導
４月26日(火)　第１回専任会議
４月27日(水)　特別支援教育実践演習　第２回全体指導
４月28日(木)　教育実践演習特別指導
５月11日(水)　教育実践プレ演習　第１回全体授業
５月12日(木)　教育実践演習　第３回全体指導
５月17日(火)　第２回専任会議
５月19日(木)　教育実践演習　第４回全体指導
５月21日(土)　教育実践集中講座(第一期１回目)
５月26日(木)　教育実践演習　第５回全体指導
６月４日(土)　教育実践集中講座(第一期２回目)
６月８日(水)　第１回編集会議
６月20日(月)　教育実践集中講座(第一期３回目)
第１回特別支援教育推進部門会議
６月21日(火)　第３回専任会議
６月22日(水)　第２回編集会議
７月４日(月)　教育実践集中講座(第一期４回目)
７月７日(木)　第１回センター運営委員会
７月19日(火)　第４回専任会議
７月21日(木)　教育実践演習　第６回全体指導
８月24日(水)　第２回特別支援教育推進部門会議
９月９日(火)　第101回国立大学教育実践研究関連センター協議会(オンライン)
９月13日(火)　第５回専任会議
９月14日(水)　教育実践プレ演習　第２回全体授業
９月14日(水)　教育実践集中講座(第一期５回目)

＜後期＞

10月14日(金)　教育実践集中講座(第二期１回目)
10月17日(月)　第６回専任会議
10月21日(金)　教育実践集中講座(第二期２回目)
10月26日(水)　教育実践プレ演習　第３回全体授業
11月２日(水)　教育実践演習　第７回全体指導
11月７日(月)　教育実践集中講座(第二期３回目)
教育実践集中講座(第二期４回目)
11月９日(水)　教育実践演習　第８回全体指導
教育実践集中講座(第二期５回目)
11月15日(火)　第７回専任会議
11月17日(木)　教育実践集中講座(第二期６回目)
11月24日(木)　特別支援教育実践演習　第３回全体指導
教育実践集中講座(第二期７回目)
11月25日(金)　教育実践集中講座(第二期８回目)
11月28日(月)　教育実践集中講座(第二期９回目)
教育実践集中講座(第二期10回目)
12月１日(木)　教育実践集中講座(第二期11回目)
12月７日(水)　第３回編集会議
12月14日(水)　第３回特別支援教育推進部門会議
教育実践集中講座(第二期12回目)
12月20日(火)　第８回専任会議
12月21日(水)　第４回編集会議
１月16日(月)　教育実践集中講座(第二期13回目)
１月17日(火)　第９回専任会議
１月23日(月)　教育実践集中講座(第二期14回目)
１月30日(月)　教育実践集中講座(第二期15回目)
教育実践集中講座(第二期16回目)
２月６日(月)　教育実践集中講座(第二期17回目)
２月14日(火)　実地教育推進部門会議(メール審議)
～20日(月)　教員研修推進部門会議(メール審議)
２月16日(木)　教職支援推進部門会議
２月21日(火)　第10回専任会議
２月21日(火)　教育開発/ICT推進部門会議(メール審議)
～27日(月)
２月22日(水)　第４回特別支援教育推進部門会議
２月28日(火)　第102回国立大学教育実践研究関連センター協議会(オンライン)
３月１日(水)　第２回センター運営委員会
３月２日(木)　2023年度学部・附属学校園教員合同研究集会(オンライン)
３月７日(火)　第11回専任会議

※その他、実地教育科目(１年次「教職概論」／２年次「教育実践プレ演習」／３年次「教育実践演習(教育実習事前事後指導)」／４年次「保育・教職実践演習」等)のコーディネート・指導を行いました。

特集 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動

第22回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

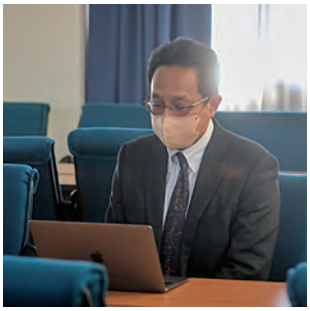
副学部長（附属連携担当）高木 由美子

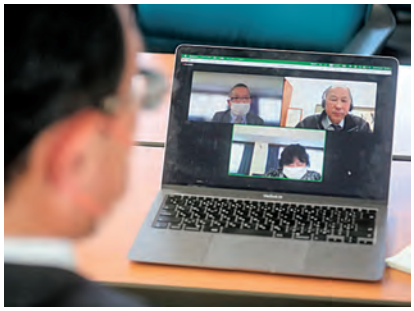
2022年度の研究集会を令和５年３月２日（木）15：30より実施しました。今年度も総務係の藤澤さんをはじめ関係の皆様のご協力のもと無事開催することができましたこと、心より感謝申し上げます。

2022年度学部・附属学校園教員による共同研究プロジェクトは、教育学部第４期重点項目であるSDGsに関する研究、SDGsに関する教育方法・教育内容、教育実践について２つの募集区分に分けて募集しました。一つは、A区分：学部教育・附属学校園の教育研究開発を支援しそれに貢献するもの、もう一つは　B区分：教育実践研究に新たな知見をひらくものについてです。A区分９件と、B区分２件を採択とし研究費を配分し、共同研究を進めていただきました。その成果は要旨集録へ掲載し公開いたしました。研究概要を本誌にもご報告いただきましたのでご覧ください。

合同研究集会は、附属学校の第４期の中期目標・中期計画および教育学部の将来ビジョンとSDGs教育プロジェクトの確認ということで、テーマを　SDGs教育「特別支援教育の今」としました。第４期の教育研究のさらなる推進のため、兵庫県立山の学校校長の田中裕一先生に、学校だけでなく発達障害を抱える人を取り巻く現状と今後について理解を深めることで、学部教員と、附属学校園教員が共にSDGs教育を推進する一助とすることを目的に実施しました。ご推薦いただいた附属坂出小学校坂井校長による講師紹介ののち、特別支援教育の現状と課題についてわかりやすくご講演いただきました。

附属学校には、コロナ後のさらなる学校教育の水準の向上のために、学部・研究科と連携し、実践的な実習・研修の場を提供するとともに、先導的な教育モデルを開発し、その成果を公開することが求められています。今後より一層強固な連携教育を進めていきたいと思います。





研究グループ報告

※大学教員は、研究代表者のみ記載。以下同じ。

デジタルポートフォリオを使用した子ども理解の共有と幼小接続

松井剛太※、附属幼稚園、附属坂出小

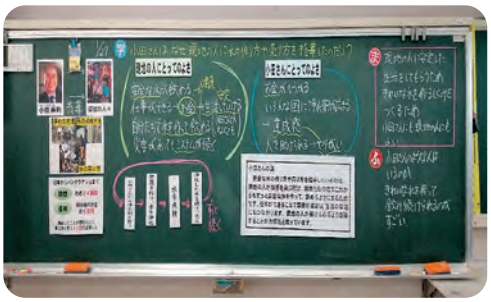
本研究では、デジタルポートフォリオの一つであるストーリーパーク【(株）グローバルパートナーズ】を使用し、個性的な学びを見せる子どもと保護者、香川大学附属幼稚園の教諭、香川大学附属小学校の教諭を対象にして、対象児が幼稚園や家庭で経験した記録を共有し、小学校への学びに接続することをねらいとした。

2022年10月から３月までに多くの記録が、幼稚園教諭、保護者から投稿され、すべての投稿に対して関係者からのコメントが付けられており、ストーリーパーク上でのやりとりもあった。対象児の担任及び保護者に対して実施したインタビューした結果、ストーリーパークの内容が対面でのコミュニケーションのきっかけとなっており、関係者間のコミュニケーションの円滑化が図られていることが明らかとなった。

接続可能か社会の形成者育成を目指す小学校第５学年社会科授業開発研究
―SDGS12エシカル消費概念に着目して―

神野幸隆※、附属坂小

持続可能な社会の形成者を目指した社会科授業における社会的事象の見方や考え方を提案し、それらを活用した授業開発を行い、実践を試みた。附属坂出小学校の網野教諭はSDGs6「すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する」の目標に着目して、第６学年国際協力の授業を開発した。地球規模で発生している安全な水を確保できないという課題の解決に取り組んでいる日本の国際貢献・協力を具体的に捉えることができる方の教材を開発した。先進国が20世紀に行ってきた援助・被援助者を固定化してしまう一方的な資金援助の関係ではなく、またこれからの我が国の持続可能な国際貢献・協力の在り方について、「WIN-WIN（相互発展）」と「（域内）経済循環」という見方や考え方を活用してあり方を模索していく授業を実践した。浄水事業の支援を入り口として現地の方の生活の安定や向上につながるという、地域社会にまで幸福が及ぶことに気づいた児童の発言が授業の後半に発せられた。



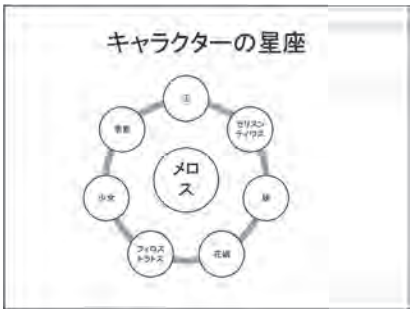
思考ツールと物語論による中学校国語学習の実践的研究

山本茂喜※、附属坂出中、附属高松中

物語論を初めとする文学理論の知見を積極的に取り入れることによって、国語の授業が大きく変わることが期待できる。特に、描写や心情をていねいに読んで帰納的に人物像や主題に迫っていくこれまでの読みの方法から、物語論の成果に基づいてトップダウン的にすばやく読み取り、物語の形式と内容の両面から疑問点を見つけて推論し、自分の考えを形成していくような学習への転換が必要である。

そこで今年度は、思考ツールを初めとするビジュアルツールによって、比較的難しいであろう文学理論的なアプローチの方法をシンプルに「見える化」し、格段にわかりやすく、また学習しやすいものにするべく実践研究を重ねた。

これまでの成果をもとに、『思考ツール×物語論で国語科の授業デザイン』（東洋館出版社）を上梓することができた。附属との共同研究としては実に四冊目の出版となる。山本の退職によりこれで一区切りとなるが、これまでのご支援に深く感謝する次第である。



ICTを活用した子どもたちの身体の姿勢・動きの個別最適化された改善プランの構築と実践実践－すべての子どもたちに健康と質の高い教育を－

西田智子※、附属特別支援学校

児童・生徒に見られる「身体の姿勢・動きの困難さ」の原因として、自閉スペクトラム症に多い不器用さ、ぎこちなさを特徴とする発達性協調運動障害（DCD）や感覚処理障害などが考えられる。それらの改善を図るためには科学的な根拠をもって指導することが必要である。本研究では、それらの特徴を知るためのアセスメントを実施し、個々の子どもの実際の身体の姿勢・動きを撮影し、学部・附属の教員と外部専門家（作業療法士）が連携して分析検討を行った。それらの結果をもとに、個別の目標を定め、個別最適化を目指して指導・改善に取り組んだ。分析結果は児童・生徒、保護者と共有した。今後は学外の子どもを支援する機関との共有や連携も図りたい。研究・実践を通して、全教員の姿勢・動きから見た子どもの特性理解及び指導実践のスキルアップを目指すとともに、支援学級等の教員が子どもの「困難さ」の課題を専門知識がなくとも容易に見出し得るチェックシート活用等のスキルの発信に努めた。

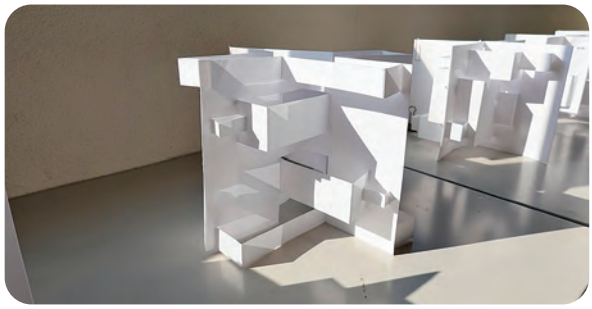
折りによる造形表現の教育開発及び実施

尹 智博※、附属坂出中、附属高松中

紙を折る事による立体造形をテーマに、学部附属学校園教員と協働により造形教育の開発及び実施を目的とした研究を試みた。紙を加工する為には、ハサミやカッターナイフ等を用いる必要性がある事から、本年は附属高松中学校と附属坂出中学校の美術教員に中学生の道具使用に関する聞き取りを試み、また今後の教育連携等について様々に意見交換を行った。

造形教育の開発及び実施に関しては、執筆者が教育学部で担当する授業内において、大学生を対象に行った。「ポップアップデザイン」や「切り絵」の手法を用いて、パターンデザインを用いた平面や立体構成の展開を行い、香川大学教育学部内で展示を行った。

研究成果は、2022年９月に開かれた日本基礎造形学会大会において「ポップアップデザインを用いた基礎造形教育について」と題した口頭発表を行った。



師範作業のマルチアングルを用いた教材作成

黒田 勉※、附属高松中、附属坂出中

オンライン授業や遠隔会議の普及に伴い、複数のカメラを利用したマルチアングルを使って記録・配信できるデバイスの低価格化が著しくなってきており、学校現場でも利用できる可能性が高まってきている。このようなマルチアングルで記録する場合、通常は全てのカメラの信号を編集機材に有線ケーブルで接続することが多く、有線ケーブルの取り回しに苦労している場合が多い。一方、これらのシステムは、多数の端末の同時接続による無線LAN回線の帯域を圧迫することが考えられるため、無線LANの帯域を使用しない機材が望まれる。

そこで本研究では、複数の視点からカメラの信号を無線LANの帯域を使用せずに編集機器に接続し、マルチアングルで工具等の取り扱いを師範する様子を同時配信（記録）することができるようになり、生徒達が集合しなくても、モニタを見ることによって工具の正しく安全な使用法の指導が観察できる手法を提案する。

そして、本手法を活用した教材を用いた授業を行い、効果の確認と発生した問題点の洗い出しを行った。

ウォーキングメソドロジーを用いた園内研修プログラムの有用性

吉川暢子※、高松園舎、附属幼稚園

本研究では身体性や感性が伴う幼児期の探索行為とアート／アート教育の親和性の高さに着目し、Arts-Based-Research（ABR）=アートによる探究の理論によるウォーキングメソドロシーを用いた園内ウォーキングを実施した。カメラを持ち、園内を散歩しながら撮影した写真について「普段は見ているつもりでも、まじまじと空を見上げたり、風を感じて見たりすることがなかった」や砂場の天井を「見上げる」や玄関マットを「見下ろす」といった見る視点に気がつくことで、改めて園内環境を見直すことが出来た。そこで撮影した写真をフォトフレームに入れ園内に展示した。飾られた写真は数日経つと風景と化してしまった。そのため、園内の展示等の在り方にも気がつくきっかけになった。園内ウォーキングを６月と11月に実施したことで、それぞれの撮影した写真から陽の光や色、影の違い、風などの見えないものに気がつき、保育者同士で環境について対話や省察を重ねることが出来た。

園内環境の再考２　－探究型園内研修を通して－

片岡元子※、高松園舎

昨年度に引き続き、各保育者の探究の過程を共に学び合う「探究型園内研修」を通して、園内環境について検討した。この時、各保育者が、探究の“場”や“視点”を設定し、子どもや遊びの様子を見取り、子どもと共に環境の工夫や再構成を行いながら園内環境を考察することにした。職務や保育経験などにより、探究の“場”や“視点”が異なり、必要感を持って探究を進めていくことができた。さらに、園内研修における取り組みの発表や意見交換により、これまで当たりまえにやってきたことを見直すとともに、まずは遊びのもつ本質的な面白さを理解することや、子どもが自分で選択したり、子どもたちが集い交流したりする機会を生み出す環境の重要性が示唆された。また、今回の実践研究を通して、各保育者が主体的に園の環境を考えていくことが、子ども理解や遊び理解を深め、園全体の保育を振り返ることにつながるとともに、保育することの面白さややりがいを感じることが見出された。

幼小連携と保育の質：領域および保育内容の指導法（言葉）から

松本博雄※、附属幼稚園、高松園舎

附属幼稚園と高松園舎にて継続的に実施してきた、書き言葉をはじめとする子どもの表現に焦点をあてたアクションリサーチ「ぶんつうプロジェクト」は４年目となった。特に本年度は、学部専門科目『保育内容の指導法（言葉）』と連携しつつ、①学童期以降の生活や学習の基盤として保障すべき言葉や文字のありようとは、②就学前－小学校教育の接続において、①の内容を効果的に共有するには、の２点の検討を目的として取り組んだ。初めての試みとして、令和５年１月31日に、本プロジェクトに研究補助者として参加していた『保育内容の指導法（言葉）』の受講生13名による報告会を、附属幼稚園および高松園舎教員８名とオンラインでつなぎ、学部教育４名の参加も得て実施した。言葉や文字は個人的な能力としてではなく、他者との間でこそレパートリーが広がる等、幼児が「書いて伝えたくなる」を支えるための手立てに関する議論を、具体的な研究資料に基づき深めることができたのは大きな成果である。

責任ある暮らしの探究を目指す小学校家庭科の題材開発
―高松市の保多織を取り上げて－

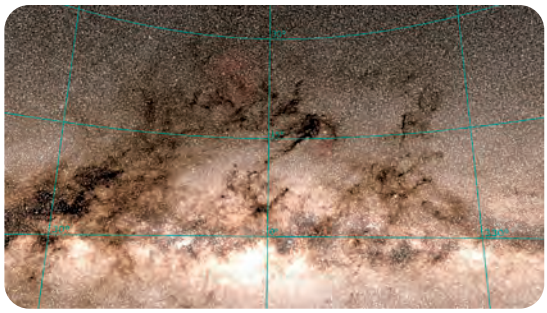
一色玲子※、附属高松小

持続可能な社会や消費者市民社会の構築に向け、生活に責任を持つ市民、生活者の育成が求められている。本プロジェクトは、これらの生活者育成とSDGsの目標12「つくる責任・つかう責任」をテーマに、小学校家庭科の教科内容の衣生活と消費・環境学習を関連付けた題材開発を行った。具体的には、高松市で江戸時代から作られている保多織という布を中心教材とし、一枚の布から責任ある暮らしの探究を目指す題材構成とした。題材に３つの軸①生産者とのかかわり（生産者から郷土の歴史や保多織の構造、作り方を知る）、②生活素材とのかかわり（吸水性、耐久性等、布素材に関する知識を深める）、③長期的な生活の視点（使い込んだ布が形を変えて新たに価値を生み出すアップサイクル等、持続可能な衣生活、消費生活のあり方を考える）を設け、初年度は学部３年生と協働した題材開発を行った。次年度も引き続き附属学校園と連携し、実践を行う予定である。

先進的なSDGs小学校理科特別プログラム構築に関する研究

松村雅文※、附属坂出中、附属高松小

本研究では、１）SDGs教育に活用できる環境調和型素材を開発し、２）その素材の特性を活かした環境に優しい科学実験教材の提示手法を確立することを目的とした。理科教材の中でも、天体は地上のどこからでも観測可能であり、科学教育としての普遍性がある。そのため、国際天文学連合（IAU）は天文学を通じての持続可能な社会の実現をめざしている（『IAU戦略プラン2020－2030』）が、天候や都市光などの影響のため、特に微弱な天体の観測は難しい場合が多い。国立天文台で開発されたフリーソフトMitakaを用いると、これらの困難さにかかわらず、子どもたちは天文の内容をわかりやすく学習できる。そのためSDGs教材としての活用と普及が期待されている。本研究では、新しいバージョンのMitaka（v.1.6.0b以降）の天の川の描写は精細であるため暗黒星雲の観察が可能であり（図を参照）、天の川や恒星の学習のための教材として充分使いうることを示した。



令和４年度 教育実践集中講座 実践報告

魅力のある職業　先生になろう。 ～夢と笑顔を大切にする教師をめざして～

藤崎 裕子・尼子 智悠・日下 哲也

第一期（4～9月）

［第１回］５月21日（土）教育法規
「教育法規とケース・スタディ①」（藤崎）
「教育法規とケース・スタディ②」（尼子）

［第２回］６月４日（土）教育法規
「教育法規とケース・スタディ③」（藤崎）
「教育法規とケース・スタディ④」（尼子）

［第３回］６月20日（月）道徳教育
「道徳科の多様な授業づくり ～心を耕す道徳の授業～」（尼子）

［第４回］７月４日（月）学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」（日下）

［第５回］９月14日（水）子ども理解
「『子ども理解』と授業実践」（藤崎）
「附属学校参観の心がまえ」

プロの教師とは何か？ ～教師になるあなたへのエール～

第二期（10～3月）

［第１回］10月14日（金）教育課題の探究
「今日の子ども状況と道徳教育」（日下）

［第２回］10月21日（金）教育課題の探究
「日本の学力問題」（尼子）

［第３回］11月７日（月）教職理解
「学校について理解しよう④」
小学校（尼子）・中学校（藤崎）

［第４回］11月７日（月）教育の最新情報①
「教師に求められる力」（藤崎）

［第５回］11月９日（水）教育実習事後指導
「教育実習を振り返って」
シンポジウム・助言（尼子・日下）

［第６回］11月17日（木）生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「中学校の事例を中心に」（藤崎）

［第７回］11月24日（木）生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「小学校における生徒指導の実際」（尼子）

［第８回］11月25日（金）校種別による選択実務研修
「はばたけ若き力を生かして ～４月からの心がまえ～」
小学校（日下）・中学校（藤崎）

［第９回］11月28日（月）教職理解
「授業について考える よい授業とは・よい保育とは」（尼子・日下）

［第10回］11月28日（月）教育の最新情報③
「教育課程と学校評価」（尼子）

［第11回］12月１日（木）生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「小学校における生徒指導の実際」（日下）

［第12回］12月14日（水）人権教育
「学校教育における人権教育 小学校での取組事例に学ぶ」（日下）

［第13回］１月16日（月）学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」（日下）

［第14回］１月23日（月）道徳教育
ケーススタディ
「道徳科の多様な授業づくり ～心を耕す道徳の授業～」（尼子）

［第15回］１月30日（月）子ども理解
「場面指導（ロールプレイ）」（日下）

［第16回］１月30日（月）子ども理解
「学級で育つ子どもたちのために」（日下）

［第17回］２月６日（月）子ども理解
「場面指導（ロールプレイ）」（日下）

藤崎 裕子 先生

尼子 智悠 先生

日下 哲也 先生

教育実践集中講座を終えて

藤崎裕子（香川県教育委員会 義務教育課 客員教員）

GIGAスクール構想のもとの教育のICT化、「学習指導要領」に続く「生徒指導提要」の改訂、いじめ・不登校等への対応、部活動の地域移行、学校の働き方改革等、教育界は変革の時を迎えています。一方、コロナ禍の中で、私たちは改めて「学校の役割」を再認識しました。集団のなかで学びと成長を促すこと、つながりを感じ安心できる居場所、学校の役割は多面的です。今後、教育の「不易と流行」を見極めることがますます重要となるでしょう。

教育実践集中講座では、教育現場に新しい風を吹き込む受講生に、「教職の魅力」を伝えることに重点を置きました。「教職理解」「子ども理解」「道徳教育」「学級経営」「生徒指導・進路指導」「人権教育」と、講座の内容は様々ですが、具体的な事例をもとに教育現場の現状と課題を捉えたり、社会の要請と国の動向について知識理解を深めたり、教員としての自分の考えを形成する場面を設定し、実際に活用できる知識の習得と資質・能力の育成をねらいました。そこでは、受講生が課題に真摯に向き合い、意見交流を通して、自分の考えを確かにしようとする姿や、「子どもと共に成長する教師になりたい」「教育実習で見つけた弱点を克服したい」というような情熱あふれる言葉にであいました。

教師は未来をひらく子どもたちを育み、あなた自身の大きな「夢」を、花咲かせる素晴らしい職業です。「プロ教師」の道は１日にして成らず。「笑顔」で、進んでいくことを願っています。

令和４年度 センター公開講演会 報告

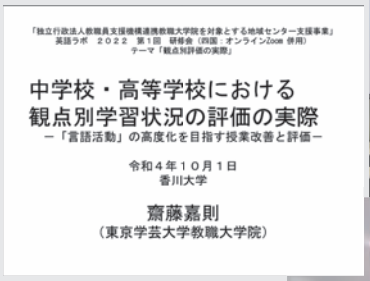
中学校・高等学校における観点別学習状況の評価の実際

講師：東京学芸大学　　齋藤嘉則　先生

令和４年10月１日（土）、独立行政法人教職員支援機構の受託事業「独立行政法人教職員支援機構連携教職大学院を対象とする地域センター支援事業」として実施される「英語ラボ2022研修会」が、「中学校・高等学校における観点別評価の実際」をテーマとして、東京学芸大学・教職大学院教授である齋藤嘉則先生を講師に迎え、コロナ禍による昨年度からの度重なる延期を経て、ハイブリッド形式により開催しました。

新学習指導要領が小・中学校に続き高等学校でも年度進行で施行が始まり評価方法の大きな変更が求められる中、本講義では、まず新学習指導要領改訂について、それに先立ち平成26年に開催された「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と教科の在り方に関する検討会」の概要を基に読み解き、観点別学習状況の評価についてその概要、評価基準の設定とその活用方法を学ぶとともに、文部科学省が新たに定義づけた「言語活動」について「学習活動⇒言語活動⇒言語行動」という高度化の過程を踏まえて解説され、「結果」の評価だけでなく「（授業時間中など）時中」の評価に今後さらに注目すべきであること等を指摘されました。本講義では演習問題にグループ単位で取り組む活動、グループ内での情報交換や講師との質疑応答など、演習活動や情報交換等多岐に分かる活動が展開されました。

参加者からは「評価についてこれまで触れたことのない情報に触れることができた」「評価は絶対評価のイメージがあり、実際に成績処理をするには数値化ばかりにとらわれていた。今日の講義を聞いて、評価はもっと言語活動に結びついたものだと分かり、今後のヒントになった。」「レッスンプランを考えたり、意見交換があったり、交流出来て、よかったです！」等のご意見をいただきました。　（文責：中住幸治／香川大学教育学部）



令和４年度　国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

センター協議会は、昨年度と同様にオンライン（Zoom）にて２回開催されました。

■第101回　令和４年９月９日（金）
■第102回　令和５年２月28日（火）

本年度は２回とも午前の開催となり、体制・運営、会計、予算等に係る審議が行われ、その後に、各センターからの報告及び意見交流が行われ、おわりに今後の活動について意見が交わされました。

今回の協議会でも、センターの各大学での役割が様々であることがわかりました。機能によって分化していくセンターが多い中、本学のように部門が増えていくセンターは少ないように思われます。本センターには多くの役割が求められていますが、これまで通り実地教育推進を大切にしつつ、他の求められてきている役割にも応えていくことの重要性を再認識しました。

今回の意見交流で、教員を目指す学生が減ってきていること、どのようにしたら学生の意欲が高まるのか、という話が多々でてきたように思われます。最近、この話題はいろいろな場面で耳にします。まさに喫緊の教員養成課題であると思われます。実地教育推進を重視している本センターとしても、様々な可能性を探究していきたく思っています。　（文責：山岸知幸）

附属学校園 この1年

香川大学教育学部の各附属学校園より、2022年度の実践研究の取り組みについて ご報告いただきます。

附属幼稚園

附属幼稚園　研究経過報告

研究主題　**保育を楽しむ保育者を目指して**
～自分（たち）らしさを生かした保育の展開～

1　研究主題について

働き方改革は、単に動労時間を短くすればよいという話ではない。これまでハード面の対策は行ってきたが、それに見合ったソフト面への改善は見過ごされていた。保育者の大変さは、こなし業務になりかねない。そこで「保育者の負担軽減」と「保育の質」の両側面から業務改善に取り組んだ。研究主題にある「楽しむ」とは、「やりがい」や「喜び」「いきがい」「ワークモチベーション」につながっていくような心の状態のことである。

2　研究の内容と成果

○システムの改善

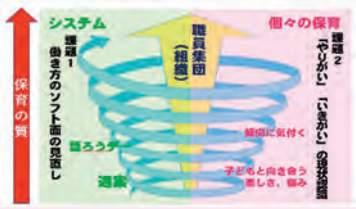
全職員で“大変さ”を感じる業務について、その意味やねらいを再確認しながら、不要部分の削減や新たな方法への変更に着手したことで、子どもや自分自身に向き合う時間と心の余裕が生まれ、本来の業務である保育に専念することが可能となった。

○個々の保育の向上

各保育者が保育にやりがいを感じるためのアプローチを考えていった。理想の保育者像を一律に求めるのではなく、それぞれの履歴に応じた気付きや成長を認め合い、“個々の保育者らしさ”や“本園の保育者集団らしさ”を生かした保育を目指していった。

右図にあるように、システムの改善と個々の保育の向上は、相互に関係し合いながら改善されるものであり、トライアル・アンド・エラーの考えのもと、職員集団（組織）で取り組むことで園全体での保育の質の向上が図られることが明らかとなった。研究発表会の講演の中で「保育に専念できるための工夫が業務改善となっている」「一人一人の特性（よさ）が最大限に発揮されるような組織づくりである」と高く評価され、R5年度からの日本教育新聞にて、今回の取組が連載されることが決定した。

子どもなりの解決に学ぶ保育者



3　今後の研究課題

子どもと主体性をこれまで以上に尊重したいと思うようになったが、ただ子どもに同調するばかりでは教育はなりたたない。「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」について考えてきたい。

附属幼稚園 高松園舎

高松園舎　研究経過報告

研究テーマ　**「環境のあり方を考える」（仮題）**

1　研究主題について

高松園舎は、豊かな自然に囲まれています。この恵まれた自然環境の中で子どもたちは日々身を置いて生活しており、この豊かな環境を生かして創ってきた遊びや文化が高松園舎にはあります。『幼稚園教育要領』（平成30年）では「幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない」と明記されています。こうした「環境」の基盤は、高松園舎においては既に存在をしていると言えます。しかし、多くの幼稚園において、幼児が身を置く環境は高松園舎のような豊かなものであるとは限らず、さらに時代とともに変化もしています。

また、こうした高松園舎にある豊かな環境、そしてそれを生かして創ってきた遊びや文化があります。こうした遊びや文化も当たり前のものではなく、高松園舎に身をおく私たち保育者は、そのことにどこまで気付き保育をしていたでしょうか。

そこで、あらためて高松園舎の環境について再考していくなかで、幼稚園にとっての「環境」について考えています。

2　研究内容と今後の研究について

本年度は、目の前の子どもに心を寄せるという地道な保育実践を積み重ねることを中心に研究を進めてきました。日々の保育実践の中での「保育記録」や「カンファレンス」、「事例検討」を通して、子どもたちと生活を共にする私たち保育者の保育そのものについて振り返っています。また、振り返りを通して、自分自身の子ども観や保育観について見直し自己の言説を問い直しています。それらを受けて、幼稚園における「環境のあり方」について探っていきたいと思います。

～“場”のもつ特性から育まれるものを探る～

～子どもとつくる環境について考える「砂場」という“場”に着目して探る～

～「“場”本来がもつ特性」と「生活の中で意味づけられた“場”の特性」があわさる～

附属高松小学校

本校の研究について

① 研究主題について

本校は、テーマを「分かち合い、共に未来を切り拓く子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。これからの先行きが不透明な社会では、価値観や年齢の違い、はじめて会った人とも分かち合いながら、未知の問題を解決するために新しい知や価値を生み出すことが必要になると考えます。私たちは、どんな時代、場所、集団においても、夢や憧れをもち自律的に学び続ける力、ひと・もの・ことへ共感的・協同的に関わる力、問題を解決し知や価値を創造する力等を発揮しながら、仲間と共に最適解を探っていける子どもこそが、研究テーマに掲げる人間像であると考えています。

② 研究内容について

本校は、令和４年度より４年間、文部科学省研究開発学校の指定を受けました。研究課題は、『個の生活知を豊かにする新領域「経験」と、体験を価値の創造につなぐ「じぶん」の時間を創設し、経験から新たな知や価値をつくる教育課程に関する研究開発』です。

新領域「経験」は、２つの小領域で構成し、異学年集団で活動を行います。

第１小領域の「はっけん」の時間は、教科学習の土台となる時間です。この時間では、異学年集団で多様な「ひと・もの・こと」との出合いを通して、学問につながる個の生活知を豊かにすることを目指します。「はっけん」の時間で獲得した生活知は、教科学習での知識と有機的につながり、知を再構成していくことに効果的に働きます。

第２小領域の「ちょうせん」の時間は、社会とつながったプロジェクト活動を通して、失敗経験や成功経験を味わいながら、生き方・在り方につながる豊かな経験をつくります。

また、「じぶん」の時間は、体験をもとに、同学年集団で議論を深め、価値の創造を目指す時間です。価値の尺度が劇的に変化するといわれる不透明な時代の中、他者との協働により、既存の知識や価値から新しい価値を生み出していくといったプロセスは、これからの社会に合った新たな価値創造のかたちになり得ると考えています。

さらに、昨年度より２年間、「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究校」として、文部科学省の委託を受け、主権者教育につながる社会科や「ちょうせん」の時間の在り方についても研究を深めました。

それらの成果を、初等教育研究発表会（令和５年２月２日、３日）で公開を致しました。多くの参会者を得て、３年ぶりの完全対面公開授業を行うことができました。

初等教育研究発表会の取り組みは、地域教育の拠点校として、また、ポストコロナ時代の研修の在り方という視点においても、全国に発信ができたと考えています。

③ 今後の研究について

新しいカリキュラムのもとで、子どもたちが生き生きと学習に取り組む姿が発信できるよう、成果と課題を整理し、よりよいものになるよう、今後も研鑽を深めていきたいと思います。

【「はっけん」の時間】

【「じぶん」の時間】

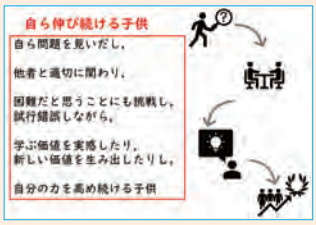
附属坂出小学校

本校の研究について

研究主題　**自ら伸び続ける子供の育成（２年次）**
～個に応じて、「さ・ぬ・き力」を育てる環境づくり～

１．研究主題等について

本校では、社会的状況を踏まえるとともに、これまでの研究成果を基にして、より主体的に学び、他者と協働しながら、意欲的に自己を高め続ける子供を育成したいと考え目指す子供の姿を、「自ら伸び続ける子供」と定義しました。この姿は、委員会活動やクラブ活動など、各教科の授業以外の場面においても見られると考えています。



「自ら伸び続ける子供」を育てるため、非認知能力に着目しました。非認知能力とは漢字の書き取りや計算などと違い、点数にして測定することが難しい力であり、例えば共感性、粘り強さ、社交性など多様です。私たちは、目指す子供の姿を実現するために必要な力を、右図のように「さ・ぬ・き力」とし、研究を進めました。これらの力は学校生活の様々な場面で発揮される力であり、子供自身の力で学校生活を豊かにするためにも必要になる力だと考えています。

２．研究内容とその成果

学習活動を、見通し、行動、振り返りの三つの場面に分けて、「さ・ぬ・き力」を発揮しやすくなるよう場面ごとに働きかけを行ってきました。また、「さ・ぬ・き力」を発揮したことと、そのよさに気付かせるために、価値付けを行うことで、子供たちが「さ・ぬ・き力」を発揮することのよさを感じ、ほかの場面でも自ら発揮していこうと意欲を高めていくと考え、実践を積み重ねてきました。その成果を、第103回教育研究発表会にて公開いたしました。４年ぶりに参集型の研究会を行い、本校の研究の成果を発信するとともに、県内外からの多くの参会者から様々なご意見やご感想をいただくことができました。今後もさらに子供の意欲を高められるよう研究に励んでいきます。

附属高松中学校

本校の研究について

研究の詳細はこちら

研究主題　自らを高め続け、新たな時代に向けて責任をもち行動する人間の育成
―知性を育み、省察性を高めるカリキュラムを通して―

第８期の研究テーマ「学校を問い直す」のもと、令和４年度の研究を進めました。上記の研究主題を定め、そのような人間に備わっている知性（「答えのない問い」に対して、その問いを問い続け、考え、判断する能力）を育み、省察性（多様な他者や社会との関係の中で、自己の生き方・在り方を問い直して調整していこうとするその人の態度や性質）を高めるカリキュラムを開発、実践しました。その結果、目指す生徒像に近づいた生徒の姿やアンケート結果の変容が見られました。また、新たに人間道徳に『個の学び：生徒一人ひとりの自由で主体的な探究と意見交換する場「ゼミ」を編成した学び』を設置し、研究、実践しております。

本校の教育研究の成果をぜひ研究発表会にてご覧になってください。

本校は、令和５年度より４年間、文部科学省研究開発学校の指定を受けました。今後もご指導を賜りますようお願い申し上げます。

研究発表会

期日　2023年６月８日（木）・９日（金）
会場　香川大学教育学部附属高松中学校
内容　公開授業、研究討議、講演、
　　人間道徳パネルディスカッション

附属坂出中学校

本校の研究について

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び
―語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案（第二次終了）―

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を継続してきた。昨年６月の研究発表会は、前回までの研究を継承しつつ、カリキュラム全体を通して「自己に引きつけた語り[1]」を生み出す実践を行っていくことで、生徒の学ぶ意味や価値の実感につなげ、生涯にわたって学び続ける生徒を育成することを提案した。後期からは、研究大会の成果と課題を踏まえ、「生徒の自己形成につながる『自己に引きつけた語り』をどのように生み出していくか」をテーマとし、「授業者のねがいの設定」と「生徒の『情意』を働かせる『しかけ』」という視点を特に重視して、「ものがたり」の授業[2]の定義をもとに実践に取り組んでいる。

【協力しながらなんとか証明しようとする姿】

平成30年度より研究開発学校指定を受けた「共創型探究学習（CAN・シャトル）」も最終年を迎え、異学年による小集団活動を通して、各立場（見習い・弟子・師匠）が生み出す意識や能力の高まりを調査するとともに、どのような教師の関わりが有効かを検証した。今期は過去の探究深化シートの分析により、仮説の精度に大きな差が見られることが分かったことから、仮説に重点を置いた教師の共通した関わりとその効果についても実践検証している。

---

[1] 「語る」行為の中でも、特に出来事（題材）と自己との関連を見つめ、時間軸の中でそれを筋立て、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為

[2] 「ものがたり」の考え方を取り入れた授業で、他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、筋立てが変わり、学ぶことの意味や価値を実感していく授業

附属特別支援学校

本校の研究について

研究主題　卒業後の豊かな生活を支える姿勢・身体の動きの改善
～小・中・高をつなぐ学習内容の充実をめざして～（３年研究２年次）

本研究は、基本的な運動技能に困難さがみられたり、協調運動を苦手とする児童・生徒の姿勢・身体の動きの改善を12年間の学びの連続性の中で目指すものです。一人一人の感覚特性を知り、個別の指導内容や指導方法に活かすことも特徴としています。「姿勢・身体の動き」に関するアセスメント５種類（発達性協調運動障がい（DCD）に関する３種類、感覚統合検査１種類、新体力テスト）を実施し、基礎データの収集と分析を行いました。その結果から小学部の研究課題は「感覚処理特性の観点からの姿勢・バランスの改善」とし、サーキット運動やチャレンジタイムを利用した個別課題に取り組みました。楽しみながら運動することに重点を置いて継続しています。中学部は「タイミングのよさ」と「力強さ」に大きな課題があったため、「投球動作に着目したバランス、協調運動の改善」を研究課題としました。運動チャレンジ課題やサーキット運動、保健体育科では「スローイングゴルフ」を取り上げて改善を図りました。高等部は「ラジオ体操を介入手段とした協調運動の改善」を課題とし、生徒が苦手とする３種の運動を選択して取り組んでいます。また本年度は外部専門家（作業療法士（OT）等）が研究に加わり、助言を得ながら指導内容や方法の検討、指導実践、評価、見直しを繰り返し行ったことも大きな特徴です。動画をはじめとする関係者との情報共有や、児童・生徒の学習活動でのICT活用も前進しています。公開研究会はYouTube配信で行い、有意義なアドバイスを頂戴した他、全国から多くの参加者がありました。来年度も卒業後の子どもたちの姿を見据え、12年間の学びの連続性を重視しながら研究に取り組みます。

小学部：でこぼこ道わたり

中学部：「スローイングゴルフ」

高等部：ラジオ体操

教育実践総合研究（第49号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第49号は
2024年５月31日（金）原稿受付締切です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究投稿要領

１（投稿の要領）
香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。
２（投稿の内容）
教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。
３（投稿者）
教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。
４（投稿原稿の提出方法）
投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿２部と、その電子ファイルを会議に提出する。
５（投稿原稿の長さ）
投稿原稿の長さは、刷り上がり12頁（１頁は24字×44行×２段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。
６（刷り上がり１頁目の形式）
刷り上がり１頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200字）及びキーワード（５語）を含むものとする。
７（投稿原稿の取り扱い）
投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。
（1）採録　（2）条件付き採録　（3）返戻
８（校正）
校正は原則として３校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則　本要領は、平成16年４月１日から適用する。
附則　本要領は、平成17年12月14日から施行し、
　　平成17年11月９日から適用する。
附則　本要領は、平成19年４月１日から施行する。
附則　本要領は、平成27年４月１日から施行する。
附則　本要領は、令和３年12月20日から施行し、
　　令和３年６月１日から適用する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
（No.11）
発行日　令和６年２月29日　　代表者　松村　雅文
教職の かゆいところに 手が届く。
香川大学教育学部　附属教職支援開発センター
〒760-8522　香川県高松市幸町 1-1
Tel.087-832-1683　Fax.087-832-1689
http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/